

同窓生が集まって作ったコミュニティ・カフェ

太田市

NPO法人 よろずや余之助



高校時代の同級生メンバーが、ランチやコーヒーが楽しめるコミュニティ・カフェの一角で、地元のためにと自分たちの知識を活かし、リラックスした雰囲気でもよろず相談を受ける。



落ち着いた話せる、ゆったりとした作り



懐かしさを感じさせ、どこかホッとさせる余之助のランチ

●活動内容

会長の桑原三郎さん(65)を中心に、太田市の高校時代の同級生が立ち上げたNPO法人よろずや余之助。コミュニティ・カフェ「余之助茶屋」では、週2回、よろず相談として、無料で相談ごとを受けている。地域の誰もが気軽に何でも話せるように配慮し、余之助茶屋の一角でかしまらずに相談できるスタイルだ。相談ごとには、建築・不動産・保険・法律・会計やその他にも、多種多様な業務に携わってきた高校時代からの仲間が、専門家の立場から解決法を提示する。

余之助茶屋は、ランチとこだわりのコーヒーを提供するカフェであり、収益は活動資金の一部になる。

また、歌集の唄をみんなで歌う歌声喫茶や、フォークソングを演奏するフォーク喫茶などのイベントもあり、70代を中心に歌好きな人が集まり、活気あふれる場が生まれている。さらに他のNPO法人や企業とも連携して情報交換を行い、よろず相談の一環として、来られない人への訪問相談も行っている。

今後の展開として、太田市が取り組む「空き家対策プロジェクト」という新しい活動にも参加する準備を進めるなど、意欲的である。

●事業を始めたきっかけ

町の活気が失われつつあり、人と人との交流が少なくなる中で地元にも「大人のたまり場」をつくりたいと考えた。

さらに、暮らしの中で起こる様々な問題や困りごとを解決し、安心・安全なまちを作っていこうと考え、メンバーが仕事を通じて長年培ってきた専門的な知識や技術などを、地域の方のために役立て恩返しをしたいという思いから、気兼ねなく相談できる場所を提供しようと、気心の知れた高校の同級生たちが集まった。県や市主催の相談会などでは、相談時間が限られてしまうが、ここは美味しいコーヒーを味わいながら時間もフリーで相談できるところが魅力。

話しやすい雰囲気を作るため、喫茶部門はコミュニティ・カフェに、さらにイベントを通じて人との交流ができる場所を作ろうと準備していた矢先、平成14年度、経済産業省の「市民活動活性化モデル事業」に選定され、本格的に事業がスタートした。

かつて多くの町や村には、お茶を飲みながら世間話をする「よろずや」があった。店名には、そんな場を再生したいとの思いが込められている。



余之助オリジナルの小物も豊富に取り揃えてある



相談事業やイベントのPOPが全テーブルに並んでいる

●工夫している点・特長

余之助はそれぞれが専門的な経験を有する専門家集団であり、悩み事を解決するための具体的な方法や手段を提示できるのが強み。

「地域サロンは多くありますが、その中でいろいろ助け合う形はまだありません。他の地域にも、自分たちの様な専門的な集団を新たに作ってほしいと願っています。コミュニティ・カフェは真面目な議論をする所ではなく、年齢にかかわらずリラックスをする憩いの場。そのため、みんなが楽しめるイベントを行い、サロンを運営しています。ここに来る人たちには、たくさんの人と

コミュニケーションを図り、寛ぎの時間を共有してもらいたいと思っています」と桑原さん。ボランティアという枠にとらわれず、コミュニティビジネスとして運営することにより、地域支援を行っている。まずは自分たちが楽しんで活動することが大切なようだ。

専門家として相談を解決するのは主に男性だが、喫茶部門などのイベントでは、50代後半～70代の女性(20～30名)が運営をサポートする。多くの人の力が活動を支えている点も意義深い。



〈やりがい・楽しみ〉

「本業だけでは、こんなに視野が広がっていません。この事業を始めてから見方が変わり、広い範囲でもものを見ることができるようになりました」と会長の桑原さん。(写真左)「若い時は自分の事しか考えられませんでした。知って

いる知識を活かしたい、人のために何かをしたい、人を育てたいという気持ちが出てきました」と副会長の小林茂治さん。(写真右)二人は同じ思いを持ち、支えてくれる仲間がいて初めて目標を成し遂げられると話してくれた。

基礎データ

☎0276-46-6887

NPO法人
よろずや余之助事業開始時期/
平成14年主な活動/
コミュニティ・カフェを通じて、さまざまな相談ごとの解決を手助けする人数・年齢/
60名 50～70代